精神科訪問看護のよい実践とは？　訪問看護の強みを皆で考えよう

○瀬戸屋　希[1)]、木戸　芳史[2)]、青木　裕見[1)]、矢内　里英[3)]、小泉　快[4)]
1)聖路加国際大学、2)浜松医科大学、3)訪問看護ステーションぽしぶる、
4)訪問看護ステーション　ソレイユハートケア

精神科訪問看護は、精神障害をもつ方とご家族の地域生活を支えるアウトリーチ型の支援として、「地域包括ケアシステム」においても重要な役割を担っています。利用者数や支援を提供する施設数も増加の途にあり、2023年には20万人を超える方が利用されています。身体合併症のケアや児童思春期、子育て期の支援、支援や治療の継続が難しい方など、利用者の支援ニーズも多様化しており、支援の見える化や質の評価が、急務の課題となっています。
精神科訪問看護では、対象者がその人らしく主体的に過ごせることを目指して、生活と健康を「共に」考えるプロセスを大事にしています。ご本人が望むこと、大事にしていることを聞き、困りごとに一緒に取り組み、対話を通じてケアプランを考えます。こうしたリカバリーに寄り添う支援は個別性が高い一方で、統一した基準で判断することが難しく、明確な答えがなく、「自分の関わりはこれで良いのだろうか」と、スタッフが迷いや難しさを感じることも少なくありません。
企画者らはこれまで、精神科訪問看護のケアのプロセスや効果を評価する方法に取り組んできました。その中で、「よい実践」は、利用者のフィードバックと関わりの意味を振り返る過程の中で可視化されていくと考えました。
本ワークショップでは、精神科訪問看護に携わっている皆さまと「よい実践」について語り合い、ケアを振り返る視点を共有したいと考えています。どんな視点で仲間や自分の支援を振り返ることができるか、アイデアを出し合って頂き、精神科訪問看護の強みを見つけて頂きたいと思います。
ケアの意味を考えることは、質の向上、そしてスタッフのエンパワメントにも繋がります。利用者・家族のエンパワメントを大事にする訪問看護だからこそ、お互いの力を引き出し、高め合う機会になりましたら幸いです。訪問看護に関わっておられる皆さまのご参加を、お待ちしています。

倫理的配慮：本ワークショップは、グループワークを中心に行います。お互いの発言を尊重し、安心して話せる場づくりにご協力ください。また、実践について話される際は、対象者が特定されないよう個人情報の保護に十分配慮いただき、内容の共有はワークショップないに留めて下さるようお願いいたします。ワークショップの開始時に、参加のルールをお伝えしますので、ご理解頂いた上でご参加ください。